

華嚴という語について

筆者が昭和三十五年大谷学会秋季公開講演会において、右の題目の下に行なった講演の要旨は大谷学報第四十卷第三号に載せられている。次下はそれを、多少の資料を加えて、やや詳説したものである。

1

小論の主題は、漢訳で六十巻または八十巻に訳出されている大方広仏華嚴經の標題の中に見える「華嚴」という語が、原語で何といい、いかなることを意味するか、についての究明である。

具さには「大方広仏華嚴經」という中、「大方広」は他のいくつかの大乗經典にも共通に冠せられる詞であるから、この經のまさしくの名称というべきは（一般に単に「華嚴」經と呼び慣らされてはいるけれども実は）「仏華

桜 部 建

嚴」である（金子大栄『華嚴經概説』一二三頁参照）こと、論議の余地が無い。その「仏華嚴」の語は、この經のチベットの語訳に見える原題 (Buddha-avatamsaka-nāma-mahāyāna-sūtra, 大谷大学図書館『西蔵大蔵經甘殊爾勘同目錄』二五八頁) や至元録に見える原題 (晡怛阿瓦怛薩甘拏麻麻訶布嚕亜麻訶衍那蘇怛囉 = Buddha-avatamsaka-nāma-mahā[vai]pulya-mahā-yāna-sūtra, 昭和法蔵總目錄第一、一九〇頁。なお南条目錄 No. 87 に示す標題 Buddhāvataṃsakamahāyānavaiṣṭyasūtra も至元録に従ったものであろう) から見て、また Mvy No. 1329 に經名として挙げられるところから見て、buddha-avatamsaka の訳に相違ないように思われる。

ところが、夙に渡辺海旭師が指摘された（宗粹雜誌、明三六・六）ように、(1)法蔵の探玄記（大正三五、一二一a）が

「華嚴」の原語を「健拏驪訶」であるとしていること、
 (2) それを承けて澄観の華嚴經疏(大正三五、五二四b)には經の具名を「摩訶毘仏略勃陀健拏驪訶修多羅」とし、それを「大方広仏雜華嚴飾經」の意と解していること、
 (3) 梵文入法界品は Gaṇḍavyūha と標題されており、その跋文 (Suzuki-Idzumi ed. p. 548, Vaidya ed. p. 436) に āryagaṇḍavyūhān mahādharmaparyāyād yathālabdhāṇ sudhanakalyāṇamitraparyupāsanaçaryaikaḍeśa āryagaṇḍavyūho mahāyānasūtraratnarājāḥ samāptāḥ (「聖ガンダヴェーハ」なる大法輪より得られたるままの、「善財童子」の善知識を恭敬する行」という一部分である、大乘の經宝の王「聖ガンダヴェーハ」了る) とあって、Gaṇḍavyūha が大『華嚴經』の總名であり同時に『入法界品』の別名でもあるというように解せられること、(4) Śikṣasamuccaya の中に華嚴經よりの引用がすべて Gaṇḍavyūha の名によってなされていること、などからして「華嚴」の原語は Avataṃsaka でなくて Gaṇḍavyūha である」と考えられようとする。

渡辺説の結論はそれであり、荻原博士(『文集』四八二—四九三頁)も「華嚴」は avataṃsaka であるよりは寧ろ gaṇḍavyūha であるとして、やや明確でない gaṇḍa の語

義について、種々に論議されている。中村博士(『大乘仏教の成立史的研究』所収、「大乘經典の成立時代」)は渡辺説を承けて「華嚴經の原名は Gaṇḍavyūha であったらしい」と言い、鈴木大拙博士(Essays in Zen Buddhism Vol. 3 所収「禪から華嚴經へ」、杉平訳「華嚴の研究」六三頁以下)は、「華嚴」の原語は Gaṇḍavyūha の方らしいが avataṃsaka の語も同様な意味であるとして、Avataṃsaka を大『華嚴經』にあて Gaṇḍavyūha を『入法界品』にあてれば、混乱を避け得てよいかも知れぬ、などと述べておられる。

しかし、先に述べたように、この經の名称は明らかに「華嚴」でなく「仏華嚴」なのであるから、「華嚴」の原語が avataṃsaka であるか gaṇḍavyūha であるかを問題にすることはすなわち「仏華嚴」が buddhāvataṃsaka であるか buddhagaṇḍavyūha であるかを問題にすることとてなくてはならない。そう考えれば結論はまことに明白である。合成語 buddhāvataṃsaka は上記のチベット語訳や至元録や Mahāvīṇīputti に見える經題の中ばかりでなく、この經の本文中にも(他の諸經典の中にも)見え、また大乘經典に先立つアヴァダーナ文学や仏伝文学の中にも数回の用例が見られるのに対して、buddhagaṇḍavyūha という言葉遣いは、澄観の大疏に漢字をもって写している

ただ一例を除いて、他のどこにも全く見出されない。このような問題についてシナの一人の註釈家のみが記すところを権証とすることはできないし、のちに述べるように澄観には誤解があったのであらうと思われるから、「仏華嚴」のまさしくの原語は *buddhāvataṃsaka* であると見定めてよいであらう。

すなわち、仏陀覚証の境地を絢爛たる表現で叙述することの大經典文字は *Buddhāvataṃsaka* の名で呼ばれたのであり、それがまた *Gaṇḍavyūha* (*Buddhagaṇḍavyūha* でない) という異名でも呼ばれたのである。そのことは、先に挙げた入法界品の跋文の最初の部分が、チベット語訳では「*saṃs rgyas phal po che* (= *Buddhāvataṃsaka*) と名づける、菩薩藏に属する *sdon po bkod pa* (= *Gaṇḍavyūha*) なる大法門の中の……」となっているところからも知られる。經典の漢訳者は *Buddhāvataṃsaka* を「仏華嚴」と訳したが、その同義異称である *Gaṇḍavyūha* に対して別個な訳語を用いることはなかったことから(法蔵のいう如く)「華嚴」が *Gaṇḍavyūha* の訳語とも見られたのである。しかし同義語とされたのはあくまでも *buddhāvataṃsaka* と *gaṇḍavyūha* であり、*avatāṃsaka* と *gaṇḍavyūha* と(従って *buddhāvataṃsaka* と *buddha-*

gaṇḍavyūha と)でないことは、梵・藏の諸用例の中で明瞭であるから、法蔵が「華嚴」を *gaṇḍavyūha* であるとしたのを承けて、澄観が「仏華嚴」を *buddhagaṇḍavyūha* であるとした所には誤解があったとせねばならない。

ところでその *buddhāvataṃsaka* の語は、大乘經典に先立つ北伝のアヴァダーナ文学や仏伝文学の中で、常に、舍衛城において釈迦牟尼仏陀が示されたところの或る神変を叙述する場合に、用いられている。そしてその神変についての説話は、(その中に *buddhāvataṃsaka* の語こそ用いられていないけれども)パーリ文献においても諸処に現われるもので、初期の仏教者にとって甚だポピュラーなものであったようである。この神変の物語と *buddhāvataṃsaka* なる語とが、北伝のアヴァダーナや仏伝文学の中で、切離し難く結合しているという事実が、この合成語の本来の意味を示すものでもあるし、華嚴經がなぜ *Buddhāvataṃsaka* と名づけられたか或いは何が華嚴經の主題であるかを示すことにもなる、と私には思われる。

2

先づパーリ伝から検討しよう。ジャータカ第四八三に次

のような物語がある。王舎城において、ピンドーラ・パールドヴァージヤ(賓頭盧)比丘が神通を現わして、外教の者の取れなかった梅檀の鉢を取って来たということがあり、そのために世尊は神通を禁止された。外教者はそれではや仏も今後は神通を用いまいと考え、逆宣伝をして自らの神通力を誇った。世尊はビンビサーラ(頻婆娑羅)王に乞われて、舎衛城において、ガンダンバ樹の下で外教者に勝る神通を見せる、と約束される。外教者は当日その樹を伐る。世尊はそれを知って別なガンダンバ樹を忽ち種子から成長させ、その樹下で「雙神変 *yamakapāṭihāriya*」を示して、外教者を伏される。その後、「過去の諸仏は神変を示したのち何処へ行かれたか」と考え、座より立って、右足をユガンダラ山にかけ、左足で須弥山を踏みまたいで、三十三天に昇り、昼度樹の下で神々に向って(他の伝では神々および母に向って)アビダルマを説かれる。その後、三条の宝階によってサンカッサに降下された、という。^①

「雙神変」は声聞には不共の神変であるといい、その内容に Ps i 125f; DhA iii 213f; 解脱道論(「雙変智」, 大正三三・四二七c)などに見えるが、それは——上半身より火のかたまりを出し下半身より水流を出す。下半身より火の

かたまりを出し上半身より水流を出す。身体の前面より火のかたまりを出し身体の背面より水流を出す。身体の背面より火のかたまりを出し身体の前面より水流を出す。右眼より火のかたまりを出し左眼より水流を出す。左眼より火のかたまりを出し右眼より水流を出す、等々——といったものである。^②

ところで、*Visuddhimagga* 第十二章「神力の解説」の中にも、右の話は語られているけれども、それとは別に、ナンダ・ウパナンダ二龍王が三宝を信じないのを知られた仏が、天上で両龍のために祝宴が開かれている時、わざと、五百の比丘を率いて天空中を行かれる、という話が同じその章に載っている(*Vism* i 399)。二龍が怒って仏と比丘らの行くのを妨げようとすると、目連がこれを伏するのである。この目連が二龍を伏するという話は雜阿含經卷二三(大正二・一六八a)、*Divyāv. XXVI—XXVII* (pp. 364—405) などにも見える。

この話と先の仏が三十三天に昇られたという話との結合が増一阿含經卷二八(大正二・七〇五b以下)に見出される。仏が舎衛城に在られた時、釈提桓因が、世尊に、三十三天に昇って仏母および諸天のために法を説かれんことを乞う。仏が天に趣こうとされると、ナンダとウパナンダは火

を以て之を妨げる。そこで目連が両龍を伏する。両龍は仏に帰し、仏は三十三天に昇られるが、そのことは衆に告知されない。世尊が、四部の衆に懈怠あるを見られたからである。衆は世尊の不在を知って怪しみ動揺する。波斯匿王・優填王はそのために苦患し、優填王の臣が王のために仏像を造った、という。仏が三十三天に昇って母のために説法したという説話は、雜阿含經卷一九(大正一、二三四a以下=S xxxx, 10) Snp A p. 36, 570; J i 193 などから仏昇初利天為母説法經(大正No. 815)、八大靈塔名号經(大正No. 1685)などに至るまで、きわめて多数伝えられている。

阿育王を仏門に導いたウバグッタ(優波幅多)長老は、過去世において、仏が舍衛城において神変を示しその後昇天しやがてサンカッサ(僧迦奢)に降下された際、終始会座にあってその事件を目撃した一人であったという。(宿命通をもって)その時のことを回顧して、阿育王にそれを物語る記述が雜阿含經卷二三の全巻を占める長い經典(特に大正一、一六五b以下)の中に、(もとより釈迦牟尼仏陀の予言の形において)見出される。その前半、世尊が神変を示されるのを見たという条(大正一、一六九c)に曰う。

又復仏住舍衛國時、如來大作神力、種種變化、作諸仏

形、滿在諸方、乃至阿迦尼吒天、我爾時亦在於中、見如來種種變化神通之相、而說偈言、

如來神通力 降伏諸外道 仏遊於十方 我親見彼相

これに相当する文章が Divyāv. Ch. XXVII (p. 401) に見られるが、そこでは

Yadapi Maharāja Bhagavatā śrāvastyāṃ tirthyāṇ vijāyarttaṃ mahāpāṭhāryaṃ kīṭaṃ buddhāvataṃsakam yāvad Akaniṣṭhabhavaṇaṃ nirmītaṃ mahat tatkalāṃ tattraivāhaṃ āsaṃ mayā tad buddhāvīkṛtitaṃ dṛṣṭam iti, āha ca :

tīrthyā yadā Bhagavatā kupathaprayātā ṛddhiprabhāvavidhinā khalu nirgrhītāḥ,
vikṛditaṃ daśabalasya tadā hy udaraṃ dṛṣṭam
mayā tu nīpaharṣakaraṇaṃ prajānām.

「大王よ、外教者に打勝たんがために舍衛城において世尊によって大神変がなされ、色究竟天にまで至る大いなる仏の集まりが化作されたその時、私はまさしくその場に在った。私はかの仏の「神通」遊戲を見た」とて、「ウバグッタ長老は」さらに「偈を説いて」曰った——悪道を行く外教者らが、神力を用いたまいたる世尊によって、圧伏せられし時、十力者(仏陀)の「神通」

遊戲をまさしくわれは見たり。「そは」人にとりては「彼らの」王を喜ばしむるものなりき。」

ここに、同じ舎衛城における神変の内容が、パーリ伝の *yamakapāṭhāriya* とは異った形で伝えられており、その中に *buddhāvataṃsaka* (それを右の訳文では「仏の集まり」と訳したが、それはチベット訳の訳例に随ったのであり、その意味については次下に述べる) の語が現われているのを見る。漢訳の「作諸仏形、満在諸方」の句も、梵文の「大いなる仏の集まりが化作された」の句も、簡略過ぎて意味がよく解らぬが、同じことを述べた仏本行經卷四(現大神変品第二十、大正四、八六a b)では

……於仏宝座 四角化現 角有四仏 座宝蓮華 因是転変 無数諸仏 座宝蓮華 塞満虚空……

となっていて、一つの仏座の四隅に、同様な仏が宝の蓮華の上に座して現われ、それらの仏がさらに無数の諸仏に転変して、同様に宝蓮華の上に坐して虚空に塞満する、という雄大な光景が、この神変によって現出されたのだということが解る。

さらに根本説一切有部毘奈耶雜事卷二六(二四、三三二b c)によると、この奇瑞は、まず最初に声聞にも共有の神変が示され、次に如来のみのもつ無上大神変が示されたとい

いうことになっているが、その声聞にも共有の神変といふものの内容は大略パーリ伝の「雙神変」に等しく、「身下出火身上出水、身上出火身下出水……」⁷、それに次いで、「無上大神変」が左のように述べられている。

……龍王知仏意已、作如是念「何因世尊以手摩地？」知仏大師欲現神变須此蓮花、即便持花大如車輪、數滿千葉、以宝為茎、金剛為鬚、從地踏(！)出、世尊見已、即於花上安穩而坐、於左右及以背後、各有無量妙宝蓮花形狀同此、自然踊出、於彼花上、一一皆有化仏安坐、各於彼仏蓮花「左」右辺及以背後、各有無量妙宝蓮花、形狀同此、自然踊出、於彼花上、一一皆有化仏安坐、重重展転、上出乃至色究竟天、蓮花相次……爾時如来広現如是神变事已、為欲調伏受化有情故、説伽他曰、

汝当求出離 於仏教勤修 降伏生死軍 如象摧草舍
於此法律中 常為不放逸 能竭煩惱海 当尽苦辺際

これに相当する梵文は *Dhāv. XII (p. 162)* に見られる。漢訳に「龍王」というところが梵文では「ナンダ・ウパナンダ二龍王」となっていて、先に挙げた諸伝承との関連がいっそう明らかである。「重重展転乃至色究竟天」に当る記述は「世尊によって大神变(Mahāpāṭhāriya)なる *Buddhāvataṃsaka* の「神通」遊戲(vikṛitā)が示さ

れた」となっている。合成語 *buddhāvataṃsaka* の意味するところが、一蓮華の上に安坐した世尊を中心として、その左右と背後においてそれぞれ同様に蓮華上に安坐した仏が在り、その一一の仏の左右及び背後にまたそれぞれ同様に蓮華上に坐した仏が在り、さらに次々と同様に仏に仏が重なり合つて、ついに色究竟天にまで至るといふ壮麗なありさまに外ならないことは、今や明瞭である。*buddhāvataṃsaka* の語は他に *Avadānaśataka* の中の第十五アヴァダーナ “*Prāhārya*,” (p. 87) にも見られるが、いずれもこの大神変に関した記述においてであり、いずれも右と同様の意味に用いられている。

avatāṃsa という語はパーリ語(しばしば *vatāṃsa* の形で現われる)でも一般のサンスクリットでも「飾り、特に花などを編んで作り頭あるいは耳につける飾り」の意をあらわす。*avatāṃsaka* はその語から出て、「華」「華嚴」「莊嚴」などと漢訳され(荻原『梵和大辞典』s.v.)ているが、それは仏典の中では、右に述べたように、明らかに、それぞれ一体の仏の上に載せた無数の蓮華の、前後左右に整然たる配列を意味している。したがって *buddhāvataṃsaka* はすなわち、蓮華上に坐した一仏を中心として、その周囲に重々無尽に列なつた壮大な華座の仏の集団である。

チベット訳においてそれが、*avatāṃsaka* の原義である「華飾り」からしては当然漢訳のように「仏の華飾り」(仏華嚴)と訳されてしかるべきであらうにそう訳されずに、*saṃs rgyas phal po che* (仏の集まり)と訳されたのはこういう意味からである。(ナルタン版目録に華嚴經の呼称を六通り挙げる中の第二の *shan gyi gon rgyan* は「耳の上の飾り」という程の意味らしく、原語としては *karṇapūra* も考えられるが、あるいは *avatāṃsaka* の原義を「耳につける華飾り」と解して、このようにチベット訳したのかも知れない。パーリ語の註釈文献は *vatāṃsaka* を *ratanamaya kaṇṇika* すなわち「寶石で作つた耳飾り」と解釈している)。

荻原博士の説(文集、四八二―九三頁)のように *phal po che* を *gaṇḍavyūha* の訳語と見たり、「兜沙すなわち *daśaka* 或いは *daśottara*」の訳語と見たりするのは、無理であらう。

3

「仏華嚴」の語がアヴァダーナ文獻の中で、右のような意味に用いられているとすれば、「仏華嚴」の名をもつこの大乘經典の中に説かれている華藏世界のアイディアが、右のような「大神変」を伝える説話に胚胎すると考えるこ

とは十分に可能であろう。もっとも、現在の經典に見る限り、実は、華嚴經の華藏世界品に説かれる蓮華藏世界の光景よりも、むしろ梵網經に蓮華台藏世界を説いて、盧遮那仏が千葉の蓮華台に坐し、その千葉に各々自己の化身たる釈迦仏を現わし、一華に百億の世界があつて、また化身を現じて説法される(大正二四、九九七c)、というものがかえつてそのイメージに近いようであるが。

その梵網經には「以三昧力故、光中見仏無量国土現為說法」(大正二四、一〇〇〇b)という句が見られるが、その三昧はおそらく無量壽經上巻に見える「仏華嚴三昧」(大正一二、二六六b)、仁王般若下巻に見える「仏華三昧」(大正八、八三二a)、八十華嚴卷一四の「仏華嚴三昧」(大正一〇、七四a)、同卷五三の「広大三昧名仏華莊嚴」(大正一〇、二七九b)などに当るもので、その内容が、前掲の諸文献に大神變の光景として描かれるところのものと深く関係することとは疑いない。右に掲げた三昧の名前の中で、最後の二つだけがチベット語訳によって原語を推測し得るが、その前者は *saṃs rgyas tshogs kyi tñ 'dgin* = *buddhapindisa-mādhī* であり、後者は *saṃs rgyas phal po che* *ses bya ba'i tñ 'dzin* = *buddhāvataṃsaka-nāma-samādhī* である。前者は偈頌の部分に含まれるので、おそ

らく *versification* のためにそのような表現をとったものと思われ、*buddhāvataṃsakasamādhī* と同義であるに違いない。そうとすればこれも *buddhāvataṃsaka* を明らかに「仏の集まり」と解する一例となるわけである (*tshogs* = *an assemblage*, *pinḍa* = *any round or roundish mass or heap*)。

大神變の物語は(北伝諸本のみならずパーリ伝においても)常に釈尊が三十三天に昇つて僧迦奢に降下されたという説話と結びつけられているが、そこにも、七処八会というように説法の会座が昇降する華嚴經の構想との関係を思わせるものがあると考えるのは、憶測に過ぎるであらうか。

最後に、『仏華嚴(*buddhāvataṃsaka*)』經の異名として用いられたと解される *gaṇḍavyūha* という語の本来の意味であるが、これについては今の私は、渡辺(『盡月全集』三三四頁)・荻原(『文集』四八五頁)両先学の論究の上に加えられるものをもたない。*gaṇḍa* を「茎」と解しても「部分、一片」と解しても「泡沫」と解しても「頰」と解しても、この場合に適合し得ると思えない。澄観のいう如く「雜華」と解し得ればよいが、実際にそのような用例は見出せないようである。チベット訳は *gaṇḍa-vyūha* を *sdon po*

bkod pa あるいは sdon pas bgyan pa としているが、
 sdon po = trunk, stem, stalk から *ganḍa* = 茎の直訳
 以上の意味を見とることはできない。ナルタン版目録に掲
 げる華嚴經の六種の呼称の第三は *pa dma'i rgyan* (蓮
 華の飾り) であるが、あるいはそれを *ganḍavyūha* と結
 びつけて解し得ないであろうかとも考える。ナルタン版目
 録に挙げる諸呼称の中、一つは *ganḍavyūha* に当るも
 のがあつて当然と思われるし、そうとすればこの第三以外
 に *ganḍavyūha* と結びつけられそうに考えられるものは
 無いからである。もしこの *padma'i rgyan* (= 華嚴) が
ganḍavyūha を原語としていると見做され得るであらう
 ならば、*ganḍa* を「華」と解する実例がそこにあるとい
 うことになるが、それは今のところ単なる推測以上には出
 ない。(本学助教授、仏教学)

註

① 四分律卷五一(大正二、九四九a)にもこの物語は少し
 変形されて見出されるが、そこには「雙神変」に当る語は無
 い。そこでは仏によつて十五日間神変が示されることになつ
 ており、その中第十一日の神変がパーリ伝の「雙神変」の記
 述に近い。

② パーリ伝によると「雙神変」はこの外にも(1)菩提道場で現
 わされ、(2)成道第二七日において現わされ、(3)釈迦族の人々
 の前において現わされ、(4)パーティカの子たちの集まつた場
 所で現わされた、という。

③ 同様な話を伝える阿育王伝(大五〇、一〇五b c)では、
 この句は「莊嚴化仏、次第上至阿迦膩吒」とあり、同じく阿
 育王經(大五〇、一四〇a b)では「作無數化仏、相好莊
 嚴、次第而上至阿迦膩吒天」とある。